

本無義の源流

今井 宇三郎

一
魏晉に行はれた般若學の一種に本無義があり、當時流行してゐた老莊思想と相俟つて、名流貴紳の間に信奉されてゐた。この本無義にも二種のものが挙げられる。それらの源流を探究すると、小大二品の般若系經典を漢訳した際、採上げた本無という訳語に發してゐると考へられる。羅什の全面的改訳に至るまで、度重なる改訳の際にも、この語が繰返し採上げられてゐる点を見ると、この語が般若空觀の理解と深く結付いてゐたことを示してゐる。

原典梵本の入手が困難を極め、胡漢両言に通ずることの容易でなかつた當時に於ては、これら意訳の漢訳經典を金科玉條として講究せざるを得なかつた。その結果、般若空觀の理解に種々の異説が發生した。これらの異説を、後世、蒐録したものによると、或は三宗を数へ、或は七宗を数へてゐる。その内の尤なるものがこの本無義である。本無の語が、支識訳道行般若經に初めて見えてから、東晉に流行した本無義にまで發展した歴史的展開には、魏晉に流行した老莊思想、特に魏の王弼・何晏等によつて提唱された無の思想が、媒介的契機をなしてゐる。この無の思想と深く結付いてゐたが故に、兩晉を通じて行はれたものと考えられる。以上の見地から、この本無義を考察してみたい。

二
隋の嘉祥大師吉藏の中觀論疏卷二末、同異門には、本無義に二家ありとして、釈道安と璩法師との本無義を挙げ、前者を正宗、後者を異

宗としてゐる。元來、同異門に挙げる七家八宗は、同文中に明言する如く、後秦僧肇の不真空論に破した三宗と、劉宋曇濟の七宗とを整合したものである。そこで、この本無義の二家についての系譜を明らかにしてみると、釈道安説の本無義は曇濟の本無宗を繼承し、璩法師説の本無義は僧肇の本無、曇濟の本無異宗を繼承してゐることを知る。まづ釈道安の本無義として、同異門に挙げるものは次の如くなつてゐる。

什師未至長安、本有三家義。一者釋道安明本無義、謂無在萬化之前、空爲衆形之始。夫人之所滞、滞在未有。若訖心本無、則異想便息。審法師云、格義迂而乖本、六家偏而未即。師云、安和上鑿荒途以開轍、標玄旨於性空。以爐冶之功驗之、唯性空之宗、最得其実。詳此意、安公明本無者、一切諸法本性空寂、故云本無。此與方等經論什瑩山門義、無異也。(大正四二・二九七)

右の文は三段、第一段は道安本無義の内容、第二段は審法師云以下、僧叔が亡師道安を評した言を嘉祥大師が整合したもの、ここに整合と云ふのは、僧叔の毘摩羅詰提經義疏序に

自慧風東扇、法言流詠以來、雖曰講肄、格義迂而乖本、六家偏而未即。性空之宗、以今驗之、最得其実。然鑪冶之功、微恨不盡。

(大正五五・五九七)

と見え、大品經序に

亡師安和上、鑿荒塗以開轍、標玄指於性空。(大正五五・五三上)と見える二文を整合してゐるからである。この第二段、並に第三段

は、直接、釈道安その人に關するもので、本無義の内容に關するものではない。その一切の諸法は本性空寂なりは道安の性空宗を指し、故に本無というというのは嘉祥の推論に過ぎない。何となれば釈道安に本無義を説いた事實はなく、その本無義として挙げられたるものは、曇濟七宗の第一、本無宗に述べてあるところのものである。

劉宋の曇濟は七宗論の著者として知られてゐるが、その内容の一端が、梁寶唱撰の名僧伝に挙げられてゐる。

第一本無立宗旨、(イ)「如來興世、以本無爲教。故方等深經、皆備明五陰本無。本無之論、由來尚矣。」何者、夫冥造之前、廓然而已。至於元氣陶化、則群像稟形。形雖資化、權化之本、則出於自然。自然自爾、豈有造之者哉。由是而言、(ロ)「無在元化之先、空爲衆形之始、故稱本無。非謂虛豁之中、能生萬有也。夫人之所滞、滞在未有。苟宅心本無、斯累豁矣。」夫崇本可以息末者、蓋此之謂也云々。

(中統乙七・一九)

文中 (イ)(ロ)の部分が一文の骨子をなすものと考へられるが、これが殆んど同文を以て、陳の慧達の肇論疏に継承されてゐる。

右の(イ)(ロ)の部分の以て、中論疏同異門の本無義の内容を考察するに、(ロ)の部分のみが整理された形に於て表出されてゐることを知る。

しかし元來、(イ)(ロ)の兩文を以て首尾をなすべきであり、(ロ)の部分のみでは文意は判明せず不完全である。この点に注目して日本安澄の中論疏記を見れば、ここにはその欠を補ひ、(イ)の部分を追加して純粹に(イ)(ロ)を以て本無義を構成してゐる。従つて、中論疏同異門の第一に挙げた本無義について考察するには、單にこの一文のみに依拠するのは妥當でない。曇濟七宗の本無義によつて考察すべきであると考へる所以である。換言すれば、第一類の本無義は曇濟の本無義を依拠とすべきである。これについては後述する。

次に第二類の本無義として中論疏に挙げるものは、本無異宗として

の琛法師の本無義である。

次琛法師云、本無者、未有色法、先有於無、故從無出有。即無在有先、有在無後、故稱本無。此釋爲肇公不真空論之所破、亦經論之所未明也。若無在有前、則非有本性是無、即前無後有、從有還無。經云、若法前有後無、即諸佛菩薩、便有過罪。若前無後有、亦有過罪、故不同此義也。(大正四二・二九上)

右は琛法師の本無義が不真空論所破のものであること、この本無義は先無後有の思想によること、並にこの思想は諸仏菩薩に過罪のあることを述べたものである。以下、順序に従つて考察する。

まづ不真空論の所破というは、既に後秦の僧肇(三八四—四一四)によつて破邪された本無義を指す。次の一文である。

本無者、情尚於無、多觸言以資無。故非有有即無、非無無亦無。尋夫立文之本旨者、直以非有非真有、非無非真無耳。何必非有無此有、非無無彼無。此直好無之談、豈謂順通事實、即物之情哉。

(大正四五・一五二上)

右の如く前後二段に分つべきであるが、前段はこの本無義の内容、後段は論主僧肇の批評である。この本無義は無を貴尚するもので、經文の、非有の有も無、非無の無も無と説く貴無宗に過ぎない。經文の本旨は、非有というは真有に非ず、非無というは真無に非ずの意を述べたものである。論主破邪して、これただ好無の談、あに事實に順通し、物の情に即すと謂はんやと評してゐる。

琛法師の本無義を以て、右の不真空論所破の本無思想なりとする根拠は那邊にあるか。案ずるに二つの根拠が挙げられる。その一はこの本無義、即ち先無後有の思想を以て、經の非有非無を解すれば、不真空論所破のごとくなり、斷無の過に陥るからである。中論疏記に、この本無義を疏して、肇論の本無に疏した元康疏を挙げ、末尾に次の如く述べてゐる。

述義云、下破。尋佛經旨、非実有故、名曰非有、非実無故、名曰非無。如何必言無其因縁有無。此直隨斷無之過耳。如是之人、不悟二諦道理、乃至中道正觀。(疏記會本二、二九下)

右は、先無後有の思想を以て、經の非有非無を説く結果、縁生の有も無、縁滅の無も無と説き、斷無の過に墮することを論じたものである。ただこれによつてのみ、この本無義を不真空論所破のそれと斷じたとすれば、中論疏の説には、論理的飛躍のあるを免れない。

案ずるに他の根拠、即ち曇濟七宗の第二、本無異宗によつて擬配したものである。曇濟七宗は、不真空論所破の三宗を發展せしめたものと考察される。かくの如く僧肇曇濟を同一系列に考へることは、少くとも、三宗と七宗とを整合して八宗を成してゐる中論疏の立場に於て、妥当すると考へられる。この立場は慧達の肇論序にも見受けられる。

曇濟の七宗に於ては、不真空論所破の本無義を本無異宗とし、別に正宗としての本無義を自ら定立したものである。この曇濟説に従つて、中論疏は、琛法師の本無義を以て不真空論所破のものとしたと論斷される。

この本無義に示された先無後有の思想は、何故に諸仏菩薩に過罪があるか。中論疏に述べるところは、經に先有後無の思想は諸仏菩薩に過罪があるというが故に、先無後有の思想もまた過罪があるとするものである。この經、並に過罪について、中論疏記には、次の如く補説してゐる。

言經云若法前有後無等者、如大品經第二十七卷成就衆生品、佛告舍利弗言、若衆生先有後無、諸佛菩薩即有過罪、諸法五道生死亦如是。論解之曰、若衆生及諸法、先有今無、諸佛賢聖有過罪。過罪者、所謂令衆生入無餘涅槃、永滅色等一切法、入空中、皆無所有。以斷滅衆生及一切法、故有過罪。(疏記會本二、二九三上)

右によつて、經とは大品經の成就衆生品をいひ、過罪とは大智度論に

解して、衆生及び一切法を斷滅するが故にと説く。これによつて中論疏もまた、前無後有の思想が諸仏菩薩に過罪があり、經論の明きところであると論斷するのである。この点を中論疏記は、反覆して論じてゐる。

述義云、准此經論、所有諸法、非有非無、從因縁故、假名有無、若如琛法師、作定執、言無在有前者、此無即是非爲有、本性是無、即前無後有。若爾者、諸佛菩薩、有先無後有之過罪也、

(疏記會本二、二九三上)

ここに、先無後有の思想が、本性は無、即ち本無となることが注目される。以上は、琛法師の本無義が先無後有の思想であり、これは不真空論所破の本無義であり、過罪あり經論の説かざるところであるとすると中論疏の説に關する考察である。

因に琛法師の何人なるかにつき、中論疏記には、竺潛、字は法深であるとの説を擧げてゐる。竺潛(二八六—三七四)の傳は梁伝卷四に具載されてゐる。これによれば、王氏一族の名流の出身であり、丞相王敦の実弟である。丞相王導(二六七—三三〇)や庾亮(二八九—三四〇)と知友であつたことが記されてゐるから、当時一流の貴紳と塵外の交をなしたことが想像される。法華經、並に大品(放光般若)に通じ、東晋中期まで活躍し、特に上下の信任を篤くしたことが記載されてゐる。しかして注意すべきは

潛優游講席、三十餘載、或暢方等、或釋老莊。投身北面者、莫不内外兼洽。至哀帝好重佛法、頻遣而使、懇懃徵請。潛以詔旨之重、暫遊宮闕、即於御筵、開講大品、上下朝士、並稱善焉。(大正九〇、三四八下)

とある一文である。ここに、「或暢方等、或釋老莊」とあり、重ねて大品を御筵に講じてゐる。

この大品は、西晋無羅叉訳二十卷本であらう。これは小品の欠漏を

補うものとして当時盛んに講究されたが、中に本無品の名が見え本無の思想が現れてゐる。これは小品系の經典に瀕出する本無思想を繼承するものであらうが、これを講ずるに当り、竺潛はその本無義を以てしたものと考察される。既に老莊にも通じ、これを釈すと云へば、當時の風尚に投じたものと考へられる。ここに老莊の無、特に王弼何晏の無の思想と、この本無義との内面的な結びつきが考へられる。竺潛の弟子、竺法蘊が同じく老莊に通じ、心無義を説いたされるのと一般である。尚、劉汝霖は東晋南北朝學術編年において、竺潛が哀帝の御筵に大品を講じた年次を、興寧三年(三六五)に繫年してゐる。これは彼の闡歷に檢して大約誤りなしとせられるが、その際に本無義を説いたとしてゐるのは、格別の根拠あるものとは考へられない。

三

翻つて前述二種の本無義を考察するに、後者の竺法深の本無義に關しては、その説の内容と人とを檢覈するを得た。前者の曇濟の本無義については、それが中論疏にいうごとく釈道安のものに非ずとして否定するたが、曇濟自らの定立によるものとするについては、尚、推定に止つた。そこで、これにつき説そのものの内容よりする考察がここになさるべきである。一文の骨子をなす(イ)の兩部分を合した疏記引述義の文を以て主意として、曇濟の所謂本無義なるものの内容につき考察する。これが、嘉祥大師によつて整理され不完全な形を以て残されてゐる本無義を採上げる最も妥當な方法と考へられる。

前文(イ)に於ては、「如來興世、以本無爲法」と、「方等深經、皆備明五陰本無」との二事を述べ、本無の論が由來ひさしきものなることを論じてゐる。云うところの方等の深經とは、管見によれば、支識詠道行般若經を濫觴とする小品系、並に大品系の漢訳般若經典を指す。周知の如く、中国仏教史上、最初に移入された大乘仏典は、月支系の般若經典であり、これが魏晋南北朝を通じて、名流貴紳より漸次庶民に

まで浸潤してゆき、後來の偉大な中国的仏教發展の黎明期を築いた。このことは般若經典の度重なる改訳や、熱心な講究によつて容易に立証される。今、小品系についてみるに、十一部(現存七部)、羅什訳に至るまでに、旧訳七部を数へうる。しかしこれが濫觴をなしたものは、実に支識詠道行般若經であつた。その意味に於ても、この漢訳は種々の影響を後來の訳經に与へてゐる。ここに論究する訳語、本無の踏襲のごときがその尤なるものである。

道行般若には本無の語、並に思想が瀕出してゐるが、その端的な表明は第十四本無品である。曇濟の所謂「如來興世、以本無爲法」については

諸天子問佛、何謂隨怛薩阿竭教、如法無所從生、爲隨怛薩阿竭教乎。

佛言、如是諸天子、諸法無所從生、爲隨怛薩阿竭教、隨怛薩阿竭教、是爲本無。本無亦無所從來、亦無所從去。怛薩阿竭本無。諸法亦本無。諸法亦本無、怛薩阿竭亦本無、無異本無。如是須菩提、隨本無、是爲怛薩阿竭本無。(大正八、四九三中)

と須菩提の隨如來教について述べる一段がそれである。論述の便宜上、以下現存の旧訳に對照するに、吳の支謙訳では同じく本無品第十に、

善業言、如來是隨如來教。何謂隨教。如法無所從生、爲隨教、是爲本無。無來原、無去迹。諸法本無、如來亦本無、無異隨本無。是爲隨如來本無。如來本無立、爲隨如來教。(大正八、四九三下)

となつてゐる。更に曇・竺共訳の般若鈔に對照するに、同じく本無品第七に

須菩提復言、如怛薩阿竭本無、是爲怛薩阿竭教。諸過去當來現在、悉爲本無。佛言隨本無者、爲隨怛薩阿竭教。諸法亦本無、如諸法本無、怛薩阿竭亦本無、一切本無、悉爲本無。是爲須菩提以隨怛薩阿

竭教、無有異隨本無者。是爲恒薩阿竭教、不異無有異、隨恒薩阿竭者、爲隨本無。本無者是爲恒薩阿竭、立須菩提之所立、爲隨恒薩阿竭教。(大正八、五二五上)

となつてゐる。

これら三つの旧訳は何れも意識であるが、この一段を羅什訳小品般若經第十五大如品、並に玄奘訳大般若經第五四八真如品等の完訳に對照してみると、これは須菩提の十如を説く一段である。この完訳を以て、旧三訳を検討するに省略不同であり、道行般若の如きは主語を誤つてゐる。それにも拘らず、本無の思想においては、道行般若にいうところを旧訳が踏襲してゐることを知る。この三訳によつて「如来興世、以本無爲教」を理解することが可能である。即ち、如来は如来教に従ふ。諸法は来原なく去迹がない。本無も来原なく去迹がない。従つて諸法は本無である。諸法が本無である如く、如来もまた本無であり、本無に異なることはない。如来は本無であると説くのが如来教である。従つて、本無に従ふのが如来教に従ふことであると解される。

次に「皆備明五陰本無」については、同じく道行般若の第十照明品に五陰の本無を説く一段が見受けられ、これが大明度經照明十方品に踏襲されてゐるが、煩を避けて引文を省略する。既に諸法の本無を説くに於ては、五陰の本無を説くは当然である。

しかして、この本無の思想に於て注意すべきは、これを無所從來、無所從去(道行)、或は無來原、無去迹(大明度)と規定してゐることである。この兩者は同思想で矛盾しないが、この思想を換言して、無所從來、無所從去を本無という訳語で表現することの可否が問題である。元來、これは諸法の空相であり、如来の如相を表現するものであるが、これを本無という訳語によつて表現することが妥当であるか否か。このことは本無品という品名の同一一段を比較検討することによつて、容易にその非なることを論斷しうる。

道行般若以下の旧三訳においては何れも本無品と訳されてゐるが、羅什訳は大如品、玄奘訳は真如品、施護訳は真如品、法賢訳は如実品と訳されてゐる。ここに明瞭に旧三訳の本無の品名は、羅什訳以後は捨てられて、大如・真如・如実と如の意に改められてゐる。正に如の意を採るべきである。然らばこの如を本無と異訳するときは如何なる異義を將來するか。旧三訳と羅什訳とを比較して、その相違の著しきものを、随如来教と随如来生とに見出す。諸法の空相を如、若しくは真如と表明するときは随如来生となり、本無と表明するときは随如来教となる。随如来生は如来の如相として把握されてゐる。諸法の空相は、正に如来の如相として把握されるべきである。ここに本無を大如もしくは真如と正した意味があると考察される。

従つて後文に於て、「無在元化之前、空爲衆形之始、故称本無」と、空を以て本無と称すことにも破綻が生ずると考へられる。ただ中論疏に所論の如く、一切の諸法は本性空寂なりとする釈道安の性空を以て、本無とし、什堅山門の義と異なるなしとするならば、問題は自ら別となる。羅什の実相、僧肇の不真空もまた、本無と称することとなるからである。

四

思ふに本無の語は、後漢末、支謙によつて初めて道行般若に採上げられてから、後來の訳經の際に継承されたばかりでなく、晋代を通じて一種の流行語の如くもてはやされたようである。東晋、裴頠の崇有論に見られるように、老子の無を本無として把握し、易は本無を体守するものの表現が見受けられる。かかる表現の基盤には、當時に於ける老莊思想の流行が考へられる。この流行に大きな媒介的契機をなしたものは、周知の如く王弼・何晏等の無の思想であつた。このことは、竺法深の本無義が先無後有の思想に基くものであることによつて推察される。それは本無異宗として、後來僧肇や嘉祥によつて破邪さ

れてゐるが、本無の思想としては、むしろ必然的展開であつたと考へられる。元來、本無の語は老莊の無に示唆を持つて採上げられたに相違ない。然し、前述の如く、それは如來の如相を表現する思想を持つべきであつた。發生的に、既に異訳としての性格を担つてゐたものが、老莊思想の流行を媒介としてもはやされるとき、無の思想に牽引されて理解されることは必然であるからである。道行般若の本無は、本性は無であるとして理解されるが、竺法深の本無は、本体は無であるの理解に立つてゐると考へられる。この本体の無より、有を出だす、即ち先無後有の思想となるからである。道行般若の本無から竺法深の本無への展開が、王弼的無の思想を媒介とするかぎり必然的であると考へられる。竺法深の本無義を以て格義となす所以である。

注一 通常、曇濟は六家七宗論の著者とされてゐる。これは梁宝唱の統法論一百六十巻に見えるところとして元康疏(大正四五、一六三上)に引くところであるが、これは誤謬を犯すものである。曇濟は七宗論の著者であつたが、これを六家七宗論と称したのは宝唱その人である。

注二、釈道安に関する直接資料からも、本無義を説いた事實はない。これは塚本博士等編梁高僧伝索引によつて確証される。これに釈道安を擬配したのは、懸達疏によるがこれは三論宗の成立事情から考察するべき問題である。釈道安その人が、三論宗にとつて重要な人物であつたことを示すもので、恰も即色に於て、支道林を正宗とし、関内即色義を別出して不真空論の即色に配した立場と一般である。

注三 記統一・二乙・二三・四所載、この肇論疏三巻を以て陳慧達の作となすにつき、中田源次郎氏の「肇論及びその註疏に就いて」(東方学報、東京第六冊)に詳細な考証あり、これに対し松本博士の反論がある。しかし中論疏記引懸達疏と合致するので、諸家、中田氏説に従ひ定説となつてゐる。

注四、述義云、釈道安本無論云、如來興世、以本無弘法、故方等衆經、皆明五陰本無、本無之論、由來尚矣。謂無在元化之前、空為衆形之始。夫人之所帶、帶在未有。若託心本無、即異想便息。准之可知。(日本藏經、中論疏記會)

本卷二、二九〇下)ここに釈道安というは、中論疏の誤謬を襲うものであること論を俟たない。

注五、肇論の懸達序にいう「或六七宗」に疏した元康疏に「或六家七宗、爰延十二者、江南本皆云六宗七宗、今尋記伝、是六家七宗也。梁朝釈宝唱作統法論一百六十巻云、宋莊嚴寺釈曇濟、作六家七宗論、論有六家、分成七宗。第一本無宗、第二本無異宗、第三即色宗、第四識含宗、第五幻化宗、第六心無宗、第七緣会宗。本有六家、第一家分為二宗、故成七宗也。」(大正四五、一六三上)と、曇濟七宗の目を挙げてゐる。これを梁宝唱撰の名僧伝抄に残存せる曇濟伝に檢するに、内容の目について誤りなきことが推察される。これにつき別稿に論ずる。

注六 大正藏經本に檢するに、第八十一の具足品に當る。經の本文において、少しく省略に従つてゐる。

注七 疏記会本卷二、二九三上下、琛・深・琛の条は反切から推して大正藏經本を妥當と考へる。大正藏經本は跋本であり、日本藏經本の疏記会本の全本なるに及ばないが、校勘に於て優れており、参考すべき点が多い。尚、宇井・武内両博士もこの疏記説に従ひ、定説となつてゐる。「支那仏教史初期における般若研究」(宇井博士、仏教学の諸問題)、並に「七宗論について」(武内博士、東洋学叢編)

注八 常磐大定博士の「後漢より宋齊に至る訳経總録」によると、羅什訳以前のものとして、次の七部を摘出しうる。

- (1) 道行般若經(摩訶般若波羅蜜經)十巻、支謙訳、後漢光和二年(一七九、訳出、(存)。
- (2) 大明度經(大明度無極經)六巻、支謙訳、呉(二三三―二五三)訳出(存)。
- (3) 五品經五巻、康僧会訳、晋太元元年(二五一)訳出、(欠、僧祐録)。
- (4) 小品經七巻、竺法護訳、晋泰始四年(二六八)訳出、(欠、費長房録)。
- (5) 摩訶般若波羅蜜道行經二巻、衛士度訳、晋惠帝時(二九〇―三〇六)訳出、(欠、僧祐録)。
- (6) 大智度無極經四巻、祇多番訳、東晋(三一七―四二〇)訳出、(欠、僧祐

録)

(7) 摩訶般若波羅蜜鈔經(長安品) 五卷 曇・竺共訳、前秦建元十八年(三

八二) 訳出、(存)。

注九 この品は梵本八千頌の 'Tathagataparivarta' に相当してゐる。Tathata は

「…の如く」の意で抽象名詞化して「如」となる。同語源の 'Tathagata' が
旧訳では恒薩阿竭と音訳されてゐるが、新訳では如来(大明度)に既に現れて

「肇論」と伝統思想

佐 川 修

一

中国仏教史に於いて、魏晉時代は、仏教の理を説くのに老・莊・易
などの外典を以てする所謂「格義」時代である。然るに、東晉末期、
後秦の弘始三年(四〇一)、鳩摩羅什が長安に到着して、多くの大乘経
典や論を漢訳し、漢族出身の英才が門下に雲集するに及び、夙に格義
仏教を排し、仏教は仏教として自主的に理解さるべきであるとした道
安(三八五寂)の主張が強く推進されることになり、ここに中国に於け
る仏教発展の本流は開始された。⁽¹⁾

「肇論」の著者僧肇(三八四—四一四)は、羅什門下の四哲の一人
で、特に般若空に対する理解の深いことについては、師により「解空第
一」と認許され、廬山の慧遠により「未だ常て有らざるなり」と激賞
された。従って、僧肇は中国に於ける仏教発展の本流の源に棹さす第
一人者であると言つてよい。

然らば、僧肇の仏教受容のしかたは果してどうであつたか。又、そ
の受容のしかたにはいかなる特異性が認められるか。そこになんらか
の特異性が認められるとすれば、中国仏教史に於ける彼の位置に鑑み

ある)と音訳され、熟してゐることによつても知られる。

注十 晋書卷三十五に見える。

老子既著五千之文、表摭機軸之弊、觀華靜一之義、有以令人厭然自夷、合於
易之損謙長節之旨、而靜一守本無、虛無之謂也。損長之風、蓋君子之一道、
非易之所以為体守本無也。觀老子之書、雖博有所經、而云有生於無、以虚為
主、偏立一家之辭、豈有以而然哉。

て、それは以後の中国仏教の性格を規定するところがありはしない
か。

この小論は、中国仏教の性格に関する手がかりを得るための一つの
試みとして、中国伝統思想の立場に立ち、僧肇の代表的著作たる「肇
論」を主なる資料として、その仏教受容のしかたを考察しようとする
ものである。

注 (1) 塚本善隆氏、「支那仏教史研究」四九頁—五一頁参照。

(2) 童壽歎言、解空第一、肇公其人。【童壽作】

(3) 肇便著般若無知論凡二千餘言、竟以是什。什讀之稱善、乃謂肇曰、
吾解不謝子、辭當相挹。時廬山隱士劉遺民見肇此論、乃歎曰、不
意方袍復有平叔、因以星遠公、遠乃撫几歎曰、未嘗有一也。【六朝僧傳
集】

二

僧肇は、「肇論」をはじめとして「注維摩經」・「寶藏論」などに
於いて、仏教の理を説くのに、老・莊は勿論、中国の古典を引用する
ことが極めて多い。その引用のしかたは、特に注意すべきものとし